

徳王の訪日と日本の 内モンゴル政策について

イ リ ナ*

は じ め に

19世紀末から20世紀の30年代まで、日本の対外侵略は大体において中国本部や「満蒙」（当時の政治用語などにつける括弧は、初出のみ付し、以後省略）を侵略する「大陸政策」で進められていた。日本は大陸政策を実現するにあたって、満蒙という政治的な地域名を作り出し、それに相応する「満蒙政策」を戦略化した。関東軍による「内蒙工作」を実行する段階で、内モンゴル¹⁾では、徳王など王公が主導した内モンゴル自治運動がおこっていた。これは日本の内蒙工作に絶好のチャンスを与えた。

1911年の辛亥革命によって、清朝が倒れ、モンゴル族に300年にわたる異民族の支配から独立するチャンスが生まれた。11年12月1日に外モンゴルは逸速く独立を宣言し、ボグド・ハン政権が成立した。内モンゴルにもいくつかの民族運動が起こっていた。

本稿で取り上げる内モンゴル自治運動は、王公である徳王（1902－1966、徳穆楚克棟魯布と漢字で表記され、日本語ではデムチョクドンロブと読む）

* 本学文学研究科博士後期課程

キーワード：徳王、徳王の訪日、蒙疆、満蒙政策、内モンゴル独立運動

のもと、「大蒙古国」を目指したモンゴル族の独立運動である。徳王の少年時代は、中国と内モンゴルの政治が激しく変化する不安定な時代だった。清朝が倒れ中華民国が成立し、外モンゴルが独立を宣言した。このような不安定な社会状況が徳王に深い影響を与えた。チンギス・ハンの末裔として「蒙古帝国」の復興は徳王の掲げた理想だった。彼の存在に注目したのが関東軍であった。強固な基盤を持たない徳王は、「蒙古独立」を企図したが、当時の国際情勢や中国内の状況でそれがうまくいかず、結局国民党・日本に利用され、その政権は日本の対中軍事戦略のもとにつくられた傀儡政府になってゆくのである。

この運動の中心にいた徳王という人物の名前を知っている人は限られており、この人物の全体像を理解している人はさらに少ない。徳王は日本とモンゴルの関係史という観点からしても、大きな役割を果たした人物である。徳王の評価は、中国・ロシア・日本など、どの視点から見てもまちまちな評価があり、そこにも矛盾が存在している。

このような複雑な状況で徳王の研究は、中国でも日本でも長いあいだ手付かずの状況に置かれていた。現在では、『徳王自伝』（『徳穆楚克棟魯布自述』の日本語全訳）、『李守信自述』、『我所知道的徳王和当時の内蒙古』、『呉鶴齡回想録』、『徳王とともに』など当時の関係者の口から語られた具体的な回想録が続々と刊行され、森の『徳王の研究』のような専門書も出た²⁾。こうして徳王に対する本格的な研究を深める条件が整い、次第に事実関係もわかるようになった。しかし、著者の立場や書かれたときの政治的な状況の関係で、上述した史料の内容には矛盾する点が多く、明確な真実を確認できない点また多く存在している。

徳王は、1945年日本敗戦までに2回訪日した。徳王の訪日については、今までほとんど検討されていない。上述したように、徳王の自述や関係者の回想録ならびに研究論文から、訪問中の様子がわかるようになってきた。

例えば、徳王の第2次訪日の行動については、中嶋の回想録に「一行の専用に特別に1等寝台車1輦が準備され、飯坂温泉、仙台、花巻温泉に泊り盛岡まで行き、その間に片倉紡績のガラス繊維工場を見学したり、松島見物や蒙古の碑に参拝したり、盛り沢山であった」（中嶋 1972e: 49）と書かれている。しかし、具体的な史料の裏付けが十分になされているとは言えない。本稿は、訪日中の徳王の行動を詳細にあとづけ、特に極めて注目すべき徳王の政治的な働きかけを明らかにしたものである。当時の新聞記事を中心に徳王の「訪日団体参加者一覧表」と「行動日程表」を作り、そして、日本の当時の公文書をはじめ、徳王、李守信、札奇斯欽、中嶋万蔵などの回想録をもとに、日本の徳王への対応を明らかにしようとするものである。

ここに本稿で使った回想録について簡単に紹介する。

1963年の夏、中国においては全国政治協商会議主席周恩來の「緊急に歴史資料を保存せよ」という指示に従って、全国各省、市で歴史資料を集める運動が行われた。『徳穆楚克棟魯布自述』、『李守信自述』は内蒙古政治協商会議文史資料研究委員会が内モンゴル現代史の生き証人である徳王、李守信の二人に回想録の執筆を要求したものである。

『徳穆楚克棟魯布自述』は徳王が第一級政治犯として長年にわたって獄中で政治教育を受け釈放されたのち、自らの記憶をもとに口述し、トブシンが筆記・編集し、1966年に完稿した資料である。この回想録の随所に徳王の自己批判の文言が盛り込まれていて、全体の論調は日本と「協力」する「妄想」が犯罪であったと懺悔する回想録の形になっている。

1964年、李守信は第二級政治犯として釈放され、政府の指示により内蒙古自治区文史館の館員に任命され、内モンゴル公安庁が建築した300平方メートルの家に住み、晩年を送った。李守信は内モンゴルジョソト盟トムト旗出身のモンゴル人である。『李守信自述』は、李守信が口述したもの

を劉映元（李守信の口述の聞き取りにあたった人）が修改・整理した回想録である。この回想録の全体的な論調は、徳王の回想録と同様に過去のことを反省したものである。

『我所知道的徳王和当時の内蒙古』は、終始内モンゴル自治運動の中枢部にいて、その指導者たちと親密な関係があった札奇斯欽（ジャクチト・スチンとカタカナで表記する）が自分自身の経験を回顧した資料である。著者は、1917年内モンゴルジョソト盟ハラチン右翼旗（現在の内モンゴル自治区の赤峰市の西南部にある）に生まれた。39年に「蒙古聯合自治政府」の民政部部長の秘書になり、43年にシリングール盟総務長に任命され、徳王の本拠地の行政責任者になった。48年上海を経由し台湾に逃れた。台湾国立政治大学の教授、国立台湾大学教授を勤め、72年アメリカに渡った。83年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に外国人客員教授として一年間留学した際に、岡田英弘のすすめによって徳王と内モンゴル自治運動についての回想録を執筆したものである。

『徳王とともに』は、中嶋万蔵（百霊廟特務機関員、蒙古聯合自治政府総務庁総務課長）が当時のことを書き残したものである。中嶋は、1933年関東軍蒙古研究員としてドロン（多倫）特務機関に配属された。のち西ソニト旗を訪問し徳王と初会見した。34年1月、日本の対内モンゴル国策機関として善隣協会が設立されると、「関東軍の徳王係」として善隣協会に出向し、現地の案内役に勤めた。中嶋は、日本人としては徳王にもっとも近い場所にいた人物である。

Ⅰ 日本による徳王政権の傀儡化

この章では歴史的背景と内モンゴル自治運動の経緯について簡単に説明する。

アヘン戦争（1840－1842年）を境として、清朝の対モンゴル政策は、初

期の漢文学習の禁止、遊牧地への漢族の侵入の禁止などいわゆる「封禁政策」から「移民実辺」政策に方針を変えた。内モンゴルの全面開放・漢民族の入植を解禁したことによって、漢人が次々に入植し、土地争いや漢人商人による高利貸問題などの民族紛争も増え、そうした牧地喪失の危険に直面した牧民の反漢反清感情も深まるばかりであった。

1911年、辛亥革命によって清朝が倒れ、中華民国が成立した。中華民国は、おおむね清朝の国家領域と民族関係を形式的にそのまま継承した国家である。これ以後中華民国は、五族共和を提唱した。この五族共和というのは、漢族・満族・蒙古族・回族・チベット族の五族が平等の立場に立ち、共同で新国家の建設にあたるという主張である。しかし、漢族への同化を主張するなど漢族中心的色彩が濃厚である。

漢族による開墾はさらに大規模に進展し、牧民のみならず王公の反発をも招き、反開墾闘争が頻発し、内モンゴルでは、高度自治を要求する声が高まった。1928年末、内モンゴル代表団が南京へ請願をおこなったのはその一例である。

シリングル盟盟長であった徳王は、内モンゴルの王公として盟旗への影響力を保持しながら、近代的教育を受けたモンゴル知識青年として、1931年頃から北平、南京で活動を開始した。徳王が内モンゴルの政治舞台に登場する契機となったのは、内モンゴル高度自治を求める南京国民政府への請願運動、および百靈廟を舞台とした内モンゴル自治運動である。関東軍が西部内モンゴルへ浸透をはかっていた頃、徳王は南京国民政府の枠内で「高度自治」を達成しようと考えていたが、なかなかうまくいかなかった。

1931年9月18日、柳条湖事件を発端とする「満洲事変」は、日本が内モンゴル支配を達成する上での決定的な画期となった。すなわち、9月22日、日本は「我国ノ支持ヲ受け東北四省及蒙古ヲ領域トセル宣統帝ヲ頭首トス

ル支那政權ヲ樹立シ在滿蒙各民族ノ樂土タラシム」(鹿島平和研究所 1973:107) という方針の「滿蒙問題解決策案」を作成した。10月2日「解決策案」をさらに具体化し、「滿蒙ヲ独立国トシ之ヲ我保護ノ下ニ置キ在滿蒙各民族ノ平等ナル發展ヲ期ス」(鹿島平和研究所 1973:163) という「滿蒙問題解決案」を作成したのである。

このような状況を背景にして、関東軍は、1935年7月「対内蒙施策要領」により、「軍は対ソ作戦並之が準備の為必要とする平時諸工作を有利ならしめ且滿洲国の国防及統治を安全容易ならしむる目的を以て先づ内蒙に於ける親日滿区域の拡大強化を図り北支工作進展に伴ひ内蒙をして中央より自立するに至らしむ 施策の重点は多倫及西スニト方面に指向す」という方針を確定した。このように日本は、対内モンゴル政策においてさらに積極的、具体的な目標を示したのである。

1936年2月10日、「蒙古軍司令部」が西ソニト旗で設立された。4月、その指導に西ウジュムチン旗で第1回蒙古大会が開かれた。この大会で蒙古軍司令部を「蒙古軍政府」に改組することを正式に決定し、5月12日徳化で蒙古軍政府の設立式典がおこなわれた。蒙古軍政府は徳王の政治力と李守信の軍事力を基礎とし、チャハル盟、シリンゴール盟、ウランチャブ盟、イクジョ盟を支配地域として成立したものである。

1937年7月7日夜、北京の西南近郊にある盧溝橋で日中両軍の衝突が発生した。いわゆる盧溝橋事件である。8月7日、13日に北平と上海が占領され、日本の中国への全面的な侵略が始まったのである。

関東軍は、8月29日察北にチャハル兵団を派遣し張家口を攻略し、9月4日「察南自治政府」を張家口に設立させた。9月13日大同を占領し、10月15日大同で「晋北自治政府」を設立させた。

関東軍は察南自治政府・晋北自治政府・蒙古聯盟自治政府を続々と設立させたののち、傀儡三政權への支配を強化するため、「蒙疆聯合委員会」

を設置した。

徳王は「蒙古独立」が一気に実現できないと考え、各盟を連合する自治政府を組織する決意をし、1937年10月、日本の支配下で「蒙古聯盟自治政府」が成立した。

徳王は「蒙古独立」を企図したが、関東軍は察南・晋北・内モンゴルの三地域を包摂する「蒙疆高度自治」を目指し、蒙疆聯合委員会を通じて、モンゴルを始め、ほかの民族を含んだ蒙疆地域の一体支配を目標にしたのである。関東軍は民族構成で多数を占める漢族を籠絡するため、「民族協和」を口実として、「蒙古独立」を許さなかった。

1939年、関東軍の支配下で、蒙古聯盟自治政府・察南自治政府・晋北自治政府の三政権が合併され、蒙古聯合自治政府が設立された。この時、徳王は関東軍によってその政権の「最高政治指導者」に祭り上げられたが、「蒙古独立」の理想を実現することができなかった。

蒙古聯合自治政府において、関東軍司令官や参謀長、最高顧問や総務庁長が交代するたびに、機構改革と人事異動がおこなわれていた。蒙疆地域は日本支配下にあり、各級行政組織は日本による支配の道具に過ぎなかったからである。

徳王が日本の傀儡になってゆく過程では、「主人」と「召使」³⁾のような衝突が何回かあった。例えば、「蒙古」と「蒙疆」という2つの呼称をめぐる問題、蒙疆聯合委員会の設立、傀儡三政権の合併問題などである。

徳王は「蒙古独立」を実現するために、日本を利用しようと考えていたが、自らは傀儡になろうとは思わなかった（森 1994：130）。

II 徳王の第1次訪日

この章では、徳王の第1次訪日について分析してみたい。1938年10月、徳王は蒙古聯盟自治政府・察南自治政府・晋北自治政府の首脳らと共に第

1次訪日を行った。李守信の回想録には、徳王の第1次訪日は1939年の春夏の間と書いているが、これは誤りである。

この時の訪日の目的について、中嶋と札奇斯欽の回想録には矛盾がある。中嶋の回想録によると、「昭和13年8月、関東軍参謀長・板垣征四郎中将が陸軍大臣に親補された。徳王は、彼が自治運動を発意しはじめて西ウヂムチン〔ウジュムチン〕で日本軍の代表者として板垣さんに会見したことであり、特に蒙古と因縁の深い板垣さんが中央に出て陸軍大臣になられたので、この際ぜひ日本に大臣を訪ね祝意を述べ、あわせて蒙古の将来に対して色々とお願ひしたいから、何とか訪日できるよう計画してくれと希望したので、厚和特務機関長・横山順（大佐）に相談し、その尽力によって徳王の希望が実現することになった」（中嶋 1972d：43）

ところが札奇斯欽の回想録によると、この時の訪日は大橋熊雄の計画だった。大橋はこの訪問を利用して、ひとつは蒙疆における傀儡政権樹立という成果を日本政府に見せ、もうひとつは徳王に日本の強大さと日本当局の意志を知らせ、蒙古独立の空想を断念させ、特に蒙疆聯合委員会の存在を認めさせるのが目的だった。一方徳王は今回の訪日を利用して、日本政府に独立する意志を直接ぶつけたかった。また察南・晋北の首脳と同行するのではなく、蒙古聯盟自治政府の首脳として単独で訪日することが徳王の希望だった。これを大橋と金井章次は決して許さなかった。このことで双方に軋轢が生じたが、結局大橋と金井の監視のもと日本を訪問するという事になった（札奇斯欽 1993：54）。

大橋は当時駐蒙兵团参謀であった。金井は奉天省公署理事官から間島省の省長になり、盧溝橋事件が発生したとき関東軍と共に入蒙し、昭和12年12月蒙疆委員会が成立すると同時に最高顧問に就任した。軍と政治の最高地位であったふたりが徳王の希望を許さないのが当然であった。

徳王の訪日は、当時の日本の新聞にも掲載された。例えば1938年10月19

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

日付『大阪毎日新聞』（以下『大毎』と略称する）の「蒙疆代表を迎ふ」には次のように見える。

蒙古聯盟自治政府の徳王，李守信，察南自治政府の于品卿，晋北自治政府の夏恭の四氏等一行より成る蒙疆聯合委員會代表は，わが國に對する感謝の使節として渡來，今朝門司着東上のはずであるが，わが國民は深くその遠來の勞を多とし，衷心より歡んでこれを迎へる。（略）。

一行は今回の渡日にあたって，友邦日本の援助提撕に深厚なる感謝を表してゐるが，この誠意と理解こそ今後永くわが國と提携し，さらに満洲國ならびに新支那諸政權と協力して和平繁榮の一途を辿るべき鍵といはねばならぬ。漢口，廣東既に危く，蔣政權の壊滅の期のいよいよ近づきつゝある一方，わが國の新興政府に對する無限の好意，事變目的貫徹についての不動の信念，わが充實せる日新の文物文化等に親炙して，一行の親日協力の決意はいよいよ深められることと信ぜられのであるが，吾等は重ねて遠來の珍客に對して深厚なる歡迎の意を表して，この行がさらに新興蒙疆政權精進の機會となることを望むものである。

また10月20日付『讀賣新聞』にも「日本の御援助に感謝 けさ來朝徳王一行メッセージ」という記事がある。

〔門司電話〕蒙疆自治政府首席徳王，李守信，察南政府最高委員于品卿，晋北自治政府最高委員夏恭の四代表以下廿一名の一行は日本政府並びに軍官民の絶大なる支援と熱誠なる後援に對し感謝の意を表するため十九日午前七時大連より門司入港の日満連絡船

黒龍丸で門司に來朝上陸第一歩を印したが船中サロンで一行は多数官民の出迎へをうけ挨拶を交したのちメッセージを發表した
メッセージ 昨夏日本皇軍は東亜永遠の和平のため正義の師を蒙疆の地に進めましたが時恰も蒙疆七百萬民衆は齊しく蔣政權の倒潰を冀求して已まなかった譯で吾々はこの民衆の總意に基づき蹶然立って新たに蒙古聯盟百萬親睦の三自治政府を設立しました、以來政府内政を整へ興業に力めてこゝに滿一年の間日本帝國より絶大なる御支援をうけたることは洵に感謝感激に堪へない所であります、この度われわれ蒙疆三自治政府首腦者が蒙疆聯合委員會指導の下に親しく貴國要路の方々に御禮を申上るの機會を得ましたことはわれわれの最も光榮とするところであります、われわれはこの度併せて萬國に比類なき尊嚴なる貴國體の神髓に接し世界に優越する貴國文化を見學し以て蒙疆政府肅正の資となすため今後ますます蒙疆並びに東洋和平のため粉骨碎身の努力を傾注したいと存じます、本日貴國に第一歩を印するに當り所信の一端を披瀝して日本帝國朝野の熱誠なる御支援に對し深甚なる謝意を表する次第であります

成吉思汗紀元七百三年民國廿七年十月十九日

徳王、李守信、于品卿、夏恭

上記2つの記事には、「蒙疆自治政府」の代表として訪日した徳王は、日本の援助に感謝しているという内容だけが盛り込まれ、また日本は彼の訪日を歓迎しているなど、あたりさわりがなくことばかり書かれていた（この時の行動は文末の「行動日程表」で示す）。当時の新聞は徳王の行動については詳しく報道するが、当然と言えば当然だが、後述する徳王と金井との衝突についてはまったく報道していない。

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

また10月22日付『大毎』の「徳王謁見 有難き御言葉を賜ふ」という記事も見られる。

蒙疆政府首脳訪日代表徳王は二十一日午前十一時十五分参内、東御車寄から鳳凰間に参進、天皇陛下には御軍装凜々しく松平式部長官、百武侍従長侍立申上げて出御謁見仰附られ、徳王は威儀を正して恭しく御前に進み來朝に當つての御挨拶を言上、敬意を表し奉れば陛下には特に優渥なる御言葉を賜ひ、天機麗しく入御、徳王は同十一時卅八分感激退出した

徳王と天皇とが会見したことを報道したのは、日本側が徳王の来日が形式的な表敬訪問であるという印象を強めるためであろう。

徳王は回想録でこの時の会見について以下のように書いている。「訪日期間中、天皇にも拝謁したが、私が『日本の援助に感謝いたします』と述べると、天皇は『東亜の平和を守る事業に協力してください』と言った。いずれも外交辞令にすぎず、実質的な問題に触れなかった」（森 1994：221）。

外務省外交史料館に、北京にいる堀内参事官から近衛外務大臣に送った「蒙疆首脳者ノ訪日ニ關スル記事掲載差止ノ件」という電報が所蔵されている。この文書は、日本当局がこの訪日について報道各社に下した命令であった。

昭和13 二九五一一 暗 北京 十月七日後發
本省 八日前着
近衛外務大臣 堀内参事官
第一五一七號（至急）

本官發天津宛電報

合第八一五號

近ク行ハルヘキ蒙疆三政府首腦者ノ訪日ニ關シテハ當地軍ヨリノ
希望モアリ（蒙疆側ノ要求アリタル由）當局竝ニ誘導責任官發表
（大體内地ニ於ケル行動ノ概要）以外一切新聞記事掲載竝ニ通信
禁止方取計ハレ度シ

尚右訪日ノ事實ハ極秘ニ附スル要アルニ鑑ミ本件ハ新聞通信社ニ
手配スルコトナク實際ノ檢閲ニ當リテ取締ル様致度シ

本電宛先、天津、張家口、青島、太原、山海關、石家莊、唐山、
張家口ヨリ大同へ轉報アリタシ
大臣、上海へ轉電セリ

この文書を見ると、万一徳王が突発的な発言という形で新聞記者に真意を表明したとしても、それが公表されてしまうことを前もって抑えておこうとしていたのがわかる。このように日本が突発事態の発生を予防したのは、当時の日本対内モンゴル政策をめぐる、両者に深刻な矛盾が存在していたからと考えられる。次に述べる「蒙古」と「蒙疆」というふたつの呼称についての矛盾は、その深刻な実例の現れのひとつである。

この矛盾について札奇斯欽は回想録で、「板垣が主催する招宴の前に、首相近衛文麿も徳王のために宴会を開いたのである。宴会の前に、徳王は近衛と会見の時間があつた。会見で徳王は近衛に、蒙古人が『蒙疆』という言葉を嫌う理由を表明した。近衛も『蒙疆』と『蒙古』の違いをわかつていたようである。しかし、近衛が宴会で挨拶する際、用意した原稿には『蒙疆』の語があらわれ、徳王にとっても不愉快な思いをさせた」（札奇斯欽 1993：55）と記録している。

また、天皇との会見を下記の通りに記録している。「徳王は金井と通訳

の吉爾嘎朗〔ジルガランとカタカナで表記する〕と一緒に天皇と会見した。この時、金井は吉爾嘎朗を『天皇と会見の際、蒙古独立建国についての話は絶対許さない。『蒙古』を一切使わず『蒙疆』を使うこと。それに、徳王の言葉を変えずそのまま訳すと、あなたの命が危ない』と脅かした」（札奇斯欽 1993：56）

徳王は回想録で訪問中に金井と、「蒙古」と「蒙疆」というふたつの呼称について衝突した事を詳しく述べている。ここで徳王回想録の一部を引用し徳王の心境を考察してみよう。

私が張家口に到着するや、すぐ出発することとなり、北京・山海関・奉天・朝鮮等を経由し、海を渡って、〔一〇月一九日〕日本の下関駅に着いた。日本国内で歓迎の人々とあいさつする際、私はいつも「蒙古」と言って、「蒙疆」とは言わなかった。私が話し終わると、私に随行する専属通訳徳古来が日本語に通訳した。金井章次は傍らにいて、すぐ新聞記者や歓迎の人々に向かって、「先程、徳王が言った「蒙古」とは「蒙疆」のことです」と説明するので、私はとても不愉快な思いをした（森 1994：218）⁴¹。私がどこでも「蒙古」とのみ口にして、「蒙疆」とは言わないので、金井章次は当然とても不満を抱いていた（森 1994：220）。私の訪日日程が終わりに近づき、東京の放送局の招請で私が日本全国に放送することになった際、金井章次は私に「蒙古」を「蒙疆」と言うよう強要するよい機会だと思って、直接私に警告したわけではないが、人を派遣して徳古来を脅迫し、次のように言った。「徳王が日本にいる間、ふたたび「蒙古」や「建国」と言うのを許しません。徳王がまたそう言ったら、日本語に通訳しないで、「蒙古」の二字をすべて「蒙疆」に直しなさい。さもなければ

ば、あなたの首が危ないですよ」(森 1994: 220)。

訪問を終えて蒙古へ帰る途中、東京で金井章次が私に「蒙疆」と呼ぶことのみを許して、「蒙古」「建国」という言い方を許されなかったのを思い出して、とても反感を覚え、思い出せば思い出すほどいやな気分になった(森 1994: 221)。

上記の引用文からは、訪問中徳王が「蒙古」という呼称に強いこだわりをもっており、一方日本はそうした徳王の姿勢を懸念しさまざまな掣肘を加えていたことがわかる。

『漢語大辞典』によれば、「蒙疆」の「疆」は国界、辺界という意味である。徳王は、「私は、『蒙古』と『蒙疆』の二字はとるに足りない言葉の意味の問題ではなく、重大な意味をもつ政治的・民族的問題であるとつねに思っていた。というのは、『蒙古』の二字は民族のみならず、土地・人民をも意味しており、しかも『蒙古』と言えば、世界中知らない者がいないからである。これは歴史上昔から確定している名称であり、『蒙疆』と改称すれば、やはり中国の辺境であって、独立した蒙古政権ではなく、中国に隷属する地方政権を意味することになってしまうのである」(森 1994: 221)と考えていた。

しかし、金井は「『蒙疆』は蒙古の疆域という意味で、察南・晋北を包摂する新政権を代表して、民族協和の役割を果たすことができるばかりか、『蒙疆』の二字はすでに日常用語としても定着しています。あなた方蒙古はいつまでたっても蒙古で、『蒙疆』の二字を援用しても、蒙古がなくなる訳ではありません」(森 1994: 225)と強弁した。

大橋も「『蒙疆』の二字は、今と昔では意味が違ってきます。張作霖が蒙疆経略使をやっていた頃、『蒙疆』の二字を使うことは、あなた方を抑圧することを意味していたが、今日『蒙疆』の二字を使うことは、日本が

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

あなた方による新政権樹立を手助けすることを意味しています」(森 1994: 224)と弁解し、金井と同じ態度に終始した。

中嶋の回想録には、「この訪日によって、徳王という『蒙古の王様』であるということで、日本国民の印象を深め、東京、大阪などを訪問して彼らも日本に対する印象に満足して、無事帰国した」(中嶋 1972d: 43)と記録されている。上述したように、もちろんこれはまったく表面的なことであって、徳王の来日をこのように演出しようとしたのが当時の日本の狙いであろう。

中嶋の回想録によると、徳王一行は日本政府から準国賓待遇の招待を受け、東京の帝国ホテルに泊まった(中嶋 1972d: 43)。しかし、李守信の回想録によると、上述したように徳王は「蒙疆」と「蒙古」の呼び方で金井ともめていた。日本政府は徳王を招待したが、溥儀が訪日した時のように国宴を開き、国家元首の扱いはしなかった。徳王の東京と大阪での行動は華族との会見、神社の参拝、見学などにすぎなかった(劉 1985: 302)。

札奇斯欽は回想録で、「日本政府当局は徳王の来訪についてはとても重視している。新聞にも大きく宣伝された。これは事実だ。日本側はやはり蒙古・徳王と友好関係を深めようとしている。したがって、察南・晋北を相手にしなかった」(札奇斯欽 1993: 54)と述べ、日本の対応について徳王に有利な解釈をした。

今回の訪日の目的に関して、徳王、李守信や札奇斯欽の回想録と、中嶋のそれとの間には矛盾が見られる。これは徳王、李守信、札奇斯欽や中嶋の回想録が書かれたときの状況と政治的な立場が違うからであろう。

III 徳王の第2次訪日

1941年2月、徳王は第2次訪日を行った。このころ日本は、満蒙政策を「南進政策」に切り替え、満蒙については大きな変化を望んでいなかった。

南進政策とは、日本が日中戦争の華南への拡大と日独軍事同盟促進論にもなって、1938年頃から軍部内に対英強硬の武力南進論が進出しはじめ、「大東亜共栄圏」の自給自足ブロック建設を目標にすすめられた南方地域への進出政策である。

中嶋の回想録によると、今回の訪問も徳王の希望だった。徳王が今回の訪日に期待したのは、今度こそ「蒙古独立」の念願を達成することである。日本政府のその時の立場は、モンゴルに対して、そこまでの考えはなかった。したがって徳王は、期待していたのに、色よい返事をもらえなかった。軍、政府首脳の表敬訪問、名所観光、学校、工場見学などで日程がいっぱいだった。こうしたスケジュールは「徳王にとってはアテツケにしか見え、事志とちがい、不機嫌になっていた」（中嶋 1972e：49）。「徳王は折角の機会にと考えていた『蒙古独立』の悲願も日本政府の同調をうけるところとならず、暗澹たる気持で帰蒙した」（中嶋 1972e：49）。

札奇斯欽の回想録を引用し、徳王の訪日目的を見てみよう。

天皇と会うことは東京での主な行動のひとつである。徳王は天皇へ支援の感謝を表し、天皇は徳王が東亜平和に努力することを願っていると表明した。これは儀礼上のことである。しかし、第1次訪日の際、徳王が天皇と会見したとき、金井は通訳吉爾嘎朗に「蒙古」を「蒙疆」に訳すようと脅かした。天皇は徳王が東亜平和のため努力することを望むと発言した。これは徳王が東亜のひとつの国家または政権の領袖であり、ある国家に隷属する政権の領袖ではないのを暗示する。これは徳王の第1次訪日の時と違っていた。近衛首相との会見は儀礼的なものである。日本軍政要人との会見は、主に東條陸相、松岡外相と興亜院長柳川中将であり、蒙古建国について話し合うことである。これも金井がいっさい反

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

対していた題目である（札奇斯欽 1993：81）。

上記の引用文からは、日本の対応は儀礼的であったが、徳王一行にとって天皇、軍、政治の関係者と会ったことが期待感を与えたようであった。札奇斯欽は、これについて第1次訪日時と同じような解説をしたのである。

今回の訪日も前回と同じように、当時の新聞に報道されていた。徳王の訪日報道について外務省外交史料館に次のような文書が所蔵されている。

昭和16 五〇八五一 暗 南京 二月八日後發 調，亜
本省 八日後着
松岡外務大臣 日高代理大使
第八五號
本官發上海宛電報
合第三五號
徳王ノ渡日ニ關シテハ下關到着迄新聞掲載竝ニ通信ヲ禁止スル様
手配方興亜院ヨリ聯絡アリタルニ付至急措置相成度シ
本電宛先，上海，北京，張家口，
大臣，漢口，廣東へ轉電セリ

上記の文書からは、今回の訪日について日本側は、徳王が下関に到着まで極秘にしていたことがわかる。当時の新聞を見ると、徳王訪日についての報道は、すべて徳王が下関に到着した15日から始まっている。それはこの指示に基づいた結果である。

日本は、報道について命令を出したばかりではなく、徳王の対応についても細かい指示を出していた。外務省外交史料館「徳王應待要領（案）」（極秘）によると次のように見える。

(極 秘) [押印あり]

徳王應待要領 (案)

徳王ノ應接ハ主トシテ外務大臣之ニ當ルコトトシ、他ノ大臣ハ成
ル可ク儀禮的引見ニ止ムルモノトス

外務大臣ノ應待ハ左記ニ依ルコトトス

記

- 一、専ラ徳王ノ現地實情ノ説明若ハ之ニ基ク希望ノ開陳ヲ聴取ス
ルニ止ム
 - 二、若シ外務大臣ノ應答ヲ要スルコトアル場合ハ、應答ハ左記(イ)
ヲ強調スルニ止メ、若シ徳王ニ於テ強テ自治權ノ設定形式ニ
ツキ回答ヲ要求スル場合ニ於テハ(ロ)ノ程度ニ之ヲ止ムルモノ
トス
 - (イ) 蒙疆ハ現状ニ鑑ミ専ラ力ヲ領域内ニ於ケル政治ノ浸透經濟
ノ開發ニ致スベキコト肝要ニシテ、徒ラニ實ニ副ハザルガ
如キ形容ノ整備ニ腐心スルハ策ヲ得タルモノニ非ズ
 - (ロ) 蒙疆ニ於テ苟モ中華民國ノ宗主權ヲ認ムル以上、蒙疆自治
ノ權限ニ關シ中華民國政府ガ蒙疆ト十分ナル協議ヲ遂グル
ニ於テハ權限規定ノ形式ハ中華民國政府ノ法令ヲ以テスル
コトハ毫モ蒙疆ノ權威ヲ害スルコト無キモノト確信シ之ニ
依ルコトニ同意シアル次第ナリ
- 但シ蒙疆ニアリテ諸般ノ情勢上形式ニ於テモ蒙華協定ヲ以
テスルコトヲ切望スルニ於テハ、客年一月青島ニ於テ汪精
衛代理ト徳王代理トノ間ニ締結セラレタル協定モ存スルコ
トナレバ前記法令ニ併存シ蒙華協定ノ成立セシムルコトニ

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

ツキ我方モ之ヲ斡旋スルニ吝カナラザルベシ

この文書の二の「若シ徳王ニ於テ強テ自治權ノ設定形式ニツキ回答ヲ要求スル場合」という文言からは、今回の訪問において、徳王が独立の要求を表明することが予想されていたことがわかる。また、(ロ)に書かれたように、日本には汪政権との関係もあるので、もし徳王の要求に応じると、日本は汪政権ともめるに違いない。日本はこれを望んでいなかったのである。そのため、(イ)「徒ラニ實ニ副ハザルガ如キ形容ノ整備ニ腐心スルハ策ヲ得タルモノニ非ズ」に書かれたように、日本は徳王の要求を制約するよう働きかけたのである。この文書には、当時の日本の内モンゴル政策の本音が露骨にあらわれており、極秘扱いされたのも当然である。

徳王は、今回の訪日について回想録で下記のように書いた。「東京での私の活動は軍・政治首脳の訪問、名所観光、学校・工場見学の類に過ぎなかったが、いたるところで日本各界の招待を受けた。私に懐柔、籠絡の限りを尽くしたとも言える」（森 1994：265）。このような状況になったのは、外務省から上記のような指示があったからであろう。

長山義男（当時は外務省の接待員）の回想録を要約して、その時の徳王の心境を見てみよう。「昭和十六年二月、蒙古聯合自治政府主席徳王が来日した。来日の目的は蒙古の『独立問題』について自分たちの熱烈な要望を日本の首脳に直接訴え、より一層の理解と支援を求めることにあった。そのころ徳王は、日本に対して“裏切られた”という憤りと怒りともいえる非常な不満を抱いていた。その怒りにも似た気持ちを抑えて、独立を切望する蒙古人の心情を吐露して日本に最後の願いを賭けようとする苦渋に満ちた心境で来日した」（長山 1987：107）⁹⁾。

近衛総理は、これらの事情を大体知っていたようであり、様々な理由を作って徳王に会うことをさけていた。徳王にしてみれば、はるばる東京ま

で来て、近衛総理に会えないままに帰ることなどできない。「では、総理のご都合つくまでお待ちしましょう」と、徳王は宮城県の鶴巻温泉まで出かけて行って4、5日費やした（長山 1987：110）。

この間、長山が細川護貞〔首相秘書官〕と何回か電話連絡を取り、やっと総理官邸において、来日のご挨拶だけで、難しい問題は持ち出さないとという条件で約束を取りつけた。会見の当日、日本側は近衛と長山、モンゴル側は徳王と通訳だけ、全くの差し向かいであった。徳王は、最初に病氣見舞の言葉を述べ、貴国から物心両面の援助を受けて感謝していると挨拶の言葉を述べ始めたが、途中で突然懷中から一通の書類を取り出して近衛の前に出した。この一通の書類は、美濃版ぐらいの大きさの紙に毛筆、楷書で書かれた相当長い漢文書の「蒙古建国促進案」である。この促進案は、徳王が起草したといわれている（長山 1987：110）

長山は回想録で、この一瞬のできことを以下のように述べている。「そのとき近衛総理は一瞬ピリッと顔を緊張させ、ゼロリと私の方を見た。その眼差しは『外務省は何をばやばやしている。挨拶だけということではなかったのか、こんな問題が出るとは私は聞いてないぞ』とこちらを叱っているように私には感じられた」（長山 1987：110）。長山も徳王がそんな書類を提出しようとは全く予想もしていなかったのである。

長山は当時の場面を次のように描いている。

しかしそこは場馴れた近衛公、提出された書類の頁をゆっくりめくりながら、『これは只今はじめて拝見いたすもので、後刻じっくり拝読してから関係大臣ともよく相談してご返事致します』と言って、両手でその書類を持ち、会釈するように確かに受取りましたというデウスチュアを示された。徳王とて、その場であれこれと論ずるつもりは毛頭なかった。それよりも折角自分が精魂こ

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

めて書いた『蒙古建国促進案』なる文書を陸軍省や外務省に見せたら途中で握りつぶされて、近衛総理の手許まで届かないかも知れない。それを彼は惧れたのだ。ならば自分で直接手渡しするに限る、それが最大の方法だと秘かに考えていたようである。来日の真の目的は実はここにあったわけである。『何卒御高覧の上御配慮給わりますようよろしくお願い申し上げます』と言って辞去した（長山 1987：110）。

首尾よく目的を達した徳王は翌朝東京を出発、途中伊勢神宮を参拝し、大阪に立ち寄り、朝鮮経由で陸路帰って行った（長山 1987：110）。

外務省外交史料館にはこのときの原文文書はないが、ひらがなとカタカナの2種類の表記による文書が所蔵されている。その内容は長山の回想録にも詳しく紹介されている。この「蒙古建国促進案」の概略は下記の通りである。

衰微数百年の蒙古族が、幸い東亜道義の国家である日本帝国の援助を承け、蒙古族も区々有限の力量を以って敢て万險を冒し、復興に連年奮闘し続けた。5年間の努力で相当に進展し、内政の強化を謀り建国の機運を待望していたが、日支条約成立し、蒙疆は華北と並列し、独立政権を形成した蒙古が中国の一部となり、再び独立の希望がなくなった。日本軍の熱心なる援助によって必ず独立するものと信じていたが、このように蒙古が中国に帰属すると、蒙古族は隠忍滅亡を待つほか道がない。蒙古独立の成否は単に蒙古自身の興隆関するのみならず、興亜大業の成敗に繋がる処大なるは決して過言ではない。日本の援助に依頼し大蒙古建設を切望し、さらに日本を盟主とし新アジアの国家群の早日に確立し、

蒙古もその一員となることを欲するものにして、即ち蒙古自身の生存発展のために努力を払う。今日本帝国が日支事変処理の必要に基づき日支条約に蒙疆と華北を並列し、蒙古民心は頹喪し、蒙疆政権は莫大な打撃を受けた。この困難中に再び独立の促進を願う。満洲のような独立国に、事情がこれを許されなければ、暫く中国の宗主権を承認する自治国に、万一自治国も許されなければ、さらに降格して自治邦とする。蒙古のこの止むを得ざる降格の要求に対してよろしく日本帝国において絶大なる同情を賜わらんことを切望する

この促進案には、モンゴルを是非独立させたい徳王の差し迫った気持ちがよく表わされている。特に最後の「この困難中に再び独立の促進を願う。満洲のような独立国に、事情がこれを許さなければ、暫く中国の宗主権を承認する自治国に、万一自治国も許されなければ、さらに降格して自治邦とする」という文言からは、日本に最後まで希望を繋ぎのぞくを得なかった徳王の複雑な気持ちがわかる。

長山は回想録で「蒙古独立が絶望となってしまった現在、徳王として、この際日本に対し言うべきことははっきり言って置こう。それが自分の責務である。しかし、直接面と向って口頭ではなかなか言いにくいこともあり十分意を尽し得ない。文書にすれば十分表現できるし、他の人びとも読むだろう。また記録として後世にまで残るだろう。これらの点を考えて彼は『蒙古建国促進案』なる一文を起草し、それを秘かに携えて来日し、近衛総理に直接手交したと思われる。言々切々独立を切望する蒙古人の心情を述べると共に、日本に対する強い抗議文でもある」（長山 1987：111）と当時の徳王の気持ちを描写している。

徳王はこの訪問を、「蒙古独立」の要望を日本の政府に直接訴え、理解

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

と支援を求めるチャンスだと思っていた。訪問中に自由な行動を取れなかったため、予定外の行動を取ったのはやむにやまれぬことである。徳王は、自身が起草した書類を渡すことによって、少しは気が済んだことであろう。

長山の回想録には、今回の会見は2月27日午前10時、場所は総理官邸と書かれている。しかし、徳王の行動を文末の「行動日程表」でたどってみると、徳王は26日午前8時21分着く電車で仙台を訪れ、27日午後1時19分盛岡駅に着き、視察・見学ののち、午後9時20分花巻温泉へ、28日から翌日は花巻温泉に滞在している。このような状況から見ると、27日の会見はありえない。一方、3月8日付『大阪朝日新聞』には「徳王、首相訪問」という記事があり、3月7日に徳王は近衛と会見したということがわかる。そうだとすれば、徳王が「蒙古建国促進案」を近衛に渡したのは7日のことと考えられる。会見の日付こそ誤っていたが、この会見の状況について生々しく記録した長山の回想録は貴重な史料である。

当時の新聞には、2月18日午後3時半、徳王は東條陸相、鈴木興亜院総務長官代理、松岡外相を歴訪と報道されているが、外務省外交史料館所蔵の史料によると、午後5時徳王と松岡大臣は1時間半ぐらい会見し、その内容は下記の通りである。

(極 秘)〔押印あり〕

(盛田理事官記)

松岡大臣、徳王會談録

(十六、二、一八 午後 五時

於 外 務 大 臣 官 邸)

先ツ徳王ヨリ今次來朝ニ關シ一應ノ挨拶ヲ述ヘタル上

「自分ハ蒙古ノ生存ハ日本ニ依存スル以外途ナシト考ヘ居リ東亜共榮圈ノ一環トシテ新東亜建設ニ^①努力スル一方蒙古民族ノ復興ヲ圖リ度希望ナルカ自分トシテハ新東亜ノ一翼トシテノ蒙古

ノ地位ニ付多少ノ意見モアリ別紙意見書ヲ作成セル次第ナリ唯茲ニ御了解願度ハ本意見書ハ單ニ自己一身ノ都合ヲ考ヘタルモノニ非ズ日本ニ都合悪シキ様ナコトハ飽迄モ之ヲ避クル方針ナルニ付日本ニ於テモ東亜建設ニ差支ナキ範圍内ニ於テ出來得ル限りノ援助ヲ與ヘラレ度」

ト述ヘ意見書ヲ手交セルニ對シ松岡大臣ヨリ

「本案ハ既ニ拜見シタカ自分個人トシテハ此ノ意見ニ對シ十分同情ヲ以テ理解シ得蒙古人トシテハ正ニ斯クアルヘキモノト考ヘラルル處外務大臣トシテハ本案ノ各項ト日支基本條約トノ關係ヲ詳細檢討ノ^②上ナラデハ御答ヘ出來ザル」

旨述ヘタル上案中ノ「國」「邦」ノ區別、民族論ヨリ見タル蒙古ト日本トノ關係等ニ付敷衍説明シ更ニ

「自分ノ根本信念トシテハ蒙古ノ問題ニ付テモ八紘一字ノ精神ヲ以テ望ムヘキテアルコトヲ固ク決意シ居レリ八紘一字トハ議會ニ於テモ度々説明セル通り世界ノ各民族ヲシテ各々其ノ所ヲ得シムルコトニシテ從テ蒙古民族カ其ノ處ヲ得ル様援助スルコトハ日本皇道ノ大理念ト心得居レリ此ノ意味ニ於テ日本ハ將來支那ヲシテ閣下ノ希望ヲ達セシムル様必ス斡旋スベシ併レドモ是ハ今直クト云フ譯ニハ行カザルベク此ノ點ハ十分閣下ニ於テモ了解サルル必要アルベシト感ズ。又自分ハ右理念ヨリ日本カ蒙古ヲ屬國ニスルガ如キコトニモ絶對反對ナリ」

トノ趣旨ヲ述ヘ更ニ繰返シテ蒙古ノ獨立實現ニ關シ最善ヲ盡ス旨附言セルニ徳王モ喜ヒノ色ヲ浮ベ厚ク大臣ノ厚意ヲ謝シタル後最後ニ

- 一．歴史上蒙古ハ^③支那ニ對シ^④隸屬關係ニアリタルコトナシ^⑤
- 二．新東亜建設ノ一翼トシテ又防共ノ第一線トシテノ蒙古ノ重要

性

三、内部統制、民心収攬上ノ必要ノ三項ヲ舉ケ一日モ早ク獨立シ度キ旨述ヘタルニ對シ大臣ヨリ右ニ對シテハ眞剣ニ考慮スベキ旨應酬シ約一時間半ニシテ會談ヲ終レリ

(原文書に書き直しがある。本稿は書き直したあとの文書を引用し、書き直し部分に下線を引いた。書き直し前の文字をここに再現する。①シ②スル③的ナル④スル⑤ヨリノ離脱)

上記の会談記録の「更ニ繰返シテ蒙古ノ獨立實現ニ關シ最善ヲ盡ス旨附言セルニ徳王モ喜ヒノ色ヲ浮ベ厚ク大臣ノ厚意ヲ謝シタル」という文言からは、徳王が自分の意思を伝えることができたという安堵の心境がうかがわれる。しかし、徳王は松岡の「最善ヲ盡ス旨附言」を聞いたにもかかわらず、「日本ニ於テモ東亜建設ニ差支ナキ範囲内ニ於テ出來得ル限リノ援助ヲ與ヘラレ度」、「一、歴史上蒙古ハ支那ニ對シ隸属關係ニアリタルコトナシ 二、新東亜建設ノ一翼トシテ又防共ノ第一線トシテノ蒙古ノ重要性 三、内部統制、民心収攬上ノ必要ノ三項ヲ舉ケ一日モ早ク獨立シ度」と、またまた「蒙古独立」を実現するために日本の援助が必要という気持ちを伝え、日本政府の理解を求めた。

お わ り に

本稿は、筆者が2003年3月桃山学院大学文学研究科に提出した、『徳王をめぐる日本とモンゴルの関係』という題目の修士論文の一部であり、徳王や関係者の書いた回想録、そして当時の日本の公文書、新聞などの史料を参照し、徳王の2回の訪日について考察したものである。

徳王は2次の訪日によって、従来つかさねられてきた矛盾、例えば

「蒙古」と「蒙疆」ふたつの呼び名についての衝突などを解決しようとした。しかし、日本はこれに対して適当にあしらうという不誠実な態度で終始した。本稿では、日本対徳王の態度と徳王の日本へ期待、それが絶望へ変わる複雑な気持ちの推移を具体的な史料から裏付けをとり、当時の日本の対蒙疆政策の本音を明らかにしたのである。

前述したように、現在徳王と蒙疆政権についての史料は充実し、徳王の研究をさらに深めることができるようになった。しかし、これら史料には相互に矛盾点があり、十分に明らかにされていない点がまた多く存在している。

注

- 1) 本稿には「蒙古」と「モンゴル」の2種類の表記が併存している。原則として筆者は「モンゴル」という表示を使い、まとめや引用文には、原文を尊重してそれに従い「蒙古」を使う。
- 2) 徳王の息子敖其尔巴图（ワチルバトとカタカナで表記する）の回想録も内モンゴルで出版されている。2003年『demčuydongrub-un vačirbatu』（『徳王之子』、内蒙古人民出版社（テムチョクドンロブのローマ字表記は中見 1995：754より引用）。
- 3) 徳王の回想録より引用（森 1994：234）。
- 4) 徳王の回想録には徳古来が通訳と書かれている（森 1994：220）。札奇斯欽の回想録によると通訳は吉爾嘎朗である（札奇斯欽 1985：55）。吉爾嘎朗は徳古来のモンゴル名である（森 1994：XII）。李守信の回想録には、吉爾嘎朗が記者会見のときに通訳を担当し、天皇と会見のときは陳国藩が通訳を担当していたと書かれている（劉 1985：302）。
- 5) 徳王の怒りの原因は、1940年11月30日、日本特命全権大使阿部信行と中国側の国民政府行政院院長汪兆銘が署名調印した「日華条約」である。この条約は前文と九ヶ条より成る。徳王は第一条の内容について不満だった。その内容の概略は下記の通りである。蒙疆（内長城線以北の地域）は国防上及経済上華日両国の強度結合地帯なる特性があり、現状に基づき広汎な自治権を

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

認める高度の防共自治区域とする。中華民国政府は蒙疆の自治に関する法令により蒙疆自治の権限を規定し、右法令の制定について日本国政府と協議する。

1938年訪日団体参加者一覧表

	職 位	名 前
指導役	蒙疆聯合委員会最高顧問	金井章次
	蒙古軍軍事顧問	金川耕作
首 脳	蒙古聯盟自治政府主席	徳王
	蒙古聯盟自治政府副主席	李守信
	察南自治政府最高委員	于品卿
	晋北自治政府最高委員	夏恭
随 員	蒙疆聯合委員会交通部顧問	伊藤祐
	蒙古聯盟自治政府秘書処顧問	村谷彦治郎
	同総務部長顧問	中嶋万蔵
	蒙疆聯合委員会事務官	木村祐次郎
	蒙疆聯合委員会	小川信三
	同上	森山久行
	同上	岩松浦
	蒙疆聯合委員会理事官	陳有聲
	副官長	阿爾弼濟呼
	同上	張啓祥
	察南自治政府総務処長	陳玉銘
	蒙古聯盟自治政府財政部長	吉爾嘎朗
	察南自治政府最高委員随行	尹世煜
	晋北自治政府最高委員随行	王守信
	総務部部長	陶克陶
	徳王の秘書	陳国藩
	(i)	杉本
	(ii)	関口保

(新聞の報道によると、今回の訪日団参加者は計21と22名の2種類がある。この表は、当時の新聞と当事者たちの回想録により作られ、合24名となる)

(i) 杉本の名前と職位は不明

(ii) 関口保の職位は不明

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

1941年訪日団体参加者一覧表

	職 位	名 前
指導役	蒙古政府最高顧問	金井章次
首 脳	蒙古聯合自治政府主席	徳王
	蒙古軍総司令	李守信
随 員	巴彦塔拉盟盟長	補英達頼
	清查権運総署署長	吉爾嘎朗
	主席府秘書処長兼参議府秘書処長	村谷彦治郎
	主席府秘書官	瑞永
	同上	超克巴達爾夫
	主席副官	李広珍
	総司令部副官処処長	阿爾弼濟呼
	民政部庶務科長	木村裕次郎
	参議府秘書官	中嶋万蔵
	総司令副官	那木四朗
	副官長	陳国藩
	同上	張啓祥
	同上	于宝衡
	同上	赫貴堂
	札薩克(i)	雄諾棟魯布

(当時の新聞によると、今回の訪日団参加者は計17と18名の2種類があり、于品卿は同行しなかった。しかし、李守信の回想録には于品卿は同行したと書かれている。)

(i) 1942年訪日時職位は不明が、『蒙古大観 昭和13年』によると、阿巴嘎右翼旗の札薩克であるという(善隣協会 1938: 502)

1938年第1次訪日行動日程表

10月13日	夕刻厚和から飛行機で張家口へ、張家口で〇〇部隊長官邸における歓送招待宴に出席、同夜11時半張家口発列車で北京へ
--------	---

14日	午前6時50分北京正陽門に着き、六国飯店で小憩ののち、午前特務部、軍司令部を訪問、北支軍最高指揮官寺内大将と会見し、午餐。午後5時日本大使館を訪れ、堀内参事官と晚餐を共にし、7時50分北京発列車で奉天經由新京へ
15日	午後5時20分新京着く、休憩ののち新京神社、忠魂塔に参拝。午後6時植田関東軍司令官官邸を訪問、のち関係幕僚と晚餐を共にし、8時過ぎ大和ホテルへ〔5)7)〕*〔大都ホテル1)〕
16日	午前10時宮内府に参内、11時張国务總理官邸を訪問、招待午餐会に出席。午後1時官邸を辞し、1時40分新京発あじあ号で大連へ、夜10時大連着く、ヤマトホテルへ
17日	午前10時半大連港で日満連絡黒龍丸に乗船、船内で大連の日本官民代表と交歓、11時日本へ
19日	午前7時門司入港の同船で来日、サロンで記者団と会談、8時15分日本に上陸、ランチで下関へ、下関山陽ホテルで休憩ののち、午前9時25分下関発電車で一路東上、午後7時55分大阪駅を通過
20日	午前7時10分東京駅着く、7時50分宿舍帝国ホテルで記者団と接見、来日歓迎を感謝するメッセージを発表、自動車で宮城二重橋前に至り、宮城を奉拝、帝国ホテルへ。午前9時半から宮中、各宮家に伺候ののち、大宮御所、秩父宮、三笠宮、高松宮、閑院宮、伏見宮各御殿に伺候、参謀本部を訪問、正午ホテルへ。午後1時半ホテルを出発、明治神社に参拝、社殿に額き、2時50分首相官邸の2階客間で近衛首相と会見、徳王に勲一等旭日大綬章、李守信に勲二等瑞宝章の勲章伝達式が行われ、のち板垣陸相、米内海相、池田蔵相を訪問、3時15分官邸を辞す、4時25分靖国神社を訪ね、6時ホテルへ。ホテルで夕食ののち、7時陸相官邸で板垣陸相の招宴に出席。*〔午後4時察南自治政府総務處長陳玉銘を東京日日新聞社に派し、入京に際し寄せられた日本各方面ならびに本社に謝意を表し、田中東亜課長が本社を代表し謝辞を3)〕*〔夜8時に記者会見を開く（劉 1985：301)〕
21日	午前11時15分東御車から宮中に参内ののち鳳凰間に参進、天皇と会見、11時半退出。横須賀訪問の予定を変更し、午後5時淀橋区西大久保の善隣協会を訪ね、同所のモンゴル留学生の学生寮、留学生の剣道、柔道の試合を見学、5時半寮を辞す、6時海相官邸

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

	で米内海相の招待晩餐に出席
22日	朝 9 時45分市役所に小橋市長を訪問, 10時退出, 10時25分東京駅発横須賀線電車で軍港横須賀へ
23日	午前 9 時靖国神社に参拝, 午後上野の動物園, 文部省美術展覧会, 科学博物館などを訪れ, 夜松井少将の歓迎晩餐会に出席。午後 9 時日比谷公会堂で開催中の花柳太郎新作発表会, 日本舞踊を鑑賞
24日	午前11時第一陸軍病院を訪れ, 傷病「勇士」のために慰問金 1 千圓を献納ののち, 2 階会議室で義手義足「勇士」の運動会を見学
25日	午後 7 時近衛首相官邸へ, 日蒙親善の晩餐会に出席
30日	午後 6 時25分から35分間にわたって愛宕山 A K からマイクを通じて全国民に感謝と重大使命達成の挨拶を放送, 国内および満洲国, 北支, 中支へ中継
31日	午前 9 時東京発特急「つばめ」で西下, 午後 2 時17分名古屋着く, 第三師団司令部, 名古屋市役所, 愛知県庁などを公式訪問, 午後 4 時宿舎名古屋観光ホテルへ
11月 1 日	午後 2 時17分名古屋駅発電車で宇治山田市へ, 4 時15分大神宮前駅着く, 二見ヶ浦朝日館へ, 6 時油屋で佐藤知事主催の歓迎会に出席
2 日	午前 8 時30分自動車で旅館を出発, 両宮に参拝, 午後 1 時27分山田駅発列車で京都へ, 5 時15分京都駅着く, 宿舎京都ホテルで小憩ののち, 都ホテルにおける府, 市, 商工会議主催の晩餐会に出席
4 日	午後渡辺郁二氏邸の招宴に出席, 午後 3 時 5 分京都発電車で奈良へ, 4 時15分奈良駅着く, 奈良ホテルへ
5 日	午前 9 時春日神社に参拝, 若山草山麓を経て, 二月堂, 三月堂, 大佛殿へ, のち県公会堂に至り, 折柄内苑で開催中の菊花大会を観賞, 三島奈良県知事らと歓談, 鹿寄せに打興じ, 興福寺, 猿澤池を経てホテルへ, 食後午後 1 時半自動車を出発, 2 時すぎ橿原へ, 大阪, 京都, 兵庫, 和歌山, 奈良からの奉仕隊と交歓, 橿原神宮, 畝傍御陵に参拝, 防共契盟の奉告。4 時25分畝傍駅発 5 時18分湊町駅着列車で大阪に着き, 宿舎新大阪ホテルで記者会見

	<p>*〔連日の歓迎攻めに疲れ、晩餐後寝室に引き籠り。午後9時30分漫才師五郎と雪江が吉本せいさんに連れられホテルに徳王を訪問6)〕</p>
6日	<p>午前9時ホテルを出発、中部防衛司令部を訪ね、谷中防司令官、熊谷部長以下幕僚らと会見、バルコニーで記念撮影、歓談ののち、大阪城天守閣に登り大阪を一望。府庁、市役所、商工会議所を巡り、池田知事、坂間市長、安宅会頭にそれぞれ会見、正午から新大阪ホテルで大阪府、市、商工会議所共同主催の歓迎会に出席、会食後池田知事が歓迎の挨拶を述べ、午後1時20分から四つ橋の電気化学館を訪れプラネタリウムを見学ののち、枚方菊人形を見物。夕方から宝塚へ、開演中の日満親善芸術使節訪日公演の満洲国大同劇団と少女歌劇を見学、7時から宝塚ホテルで阪急主催晩餐会に出席、9時過ぎ新大阪ホテルへ</p>
7日	<p>徳王、李守信のモンゴル班、于品卿、夏恭の察南、晋北班と2班に別れ、午前9時ホテルを出発。9時20分徳王と李守信は造幣局に着き小憩ののち30分見学、9時50分造幣局を出発、10時大阪工場に着き、1時間半見学。于品卿と夏恭は大阪株式取引所、陸軍造兵場、鐘紡淀川工場などを見学、正午大阪川口町天華俱樂部で徳王と李守信と合流。のち同所に置ける東亜輸出組合、蒙疆会、大阪市産業部内組合主催の午餐会に出席、午後3時40分から4時20分まで大阪朝日新聞本社を訪問ののち、「水都号」で大阪港内を巡回視察、夜阪口楼における鐘紡主催の晩餐会に出席ののち道頓堀の夜景を見物</p>
8日	<p>李守信、夏恭、于品卿3氏午前9時新大阪ホテルを出発、地下鉄梅田駅から難波駅へ、南海高島屋1階サロンで同社林田、大谷両取締役、本社刀欄館営業局長らと小憩歓談ののち、7階で開催中の本社内国策製品愛用促進会主催『新興代用品展』を見学。浪速区水崎町の中山太陽堂化粧品工場を見学、住吉区松崎町の中山太一氏本邸に至り徳王一行と合流し、中山氏の招待午餐会に出席。午後2時歌舞伎座を訪れ、貴賓室で白井松竹会長から歓迎の挨拶、閉幕と同時に舞台上がり扮装のままの菊五郎と会見、3時大阪外語学校を訪問、同校出身者で満蒙工作の犠牲となった人々を祀る『烈士之碑』に参拝、応接室に内モンゴルで戦死した足立武夫の父駒吉、大月桂の父勝太郎と面会ののち、大阪中央放送局を見</p>

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

	学し、4時20分宿舍大阪ホテルへ、夜ホテルで静養＊〔李・夏・于3氏と合流までの徳王の行動は不明〕
9日	午後1時40分ホテルを出発、阪急梅田から特別電車で神戸へ、2時30分三宮駅着く、兵庫県知事、八木神戸市助役、秋山商工会議所副会頭らの歓迎を受けオリエンタル・ホテルへ、30分休憩ののち会議所、県庁、市役所を歴訪、湊川神社に奉奠し参拝玉串を奉し、諏訪山展望所で港一帯を眺め、午後5時過ぎ県、市会議所連合の歓迎会に出席、7時40分発のすみれ丸で別府へ
20日	張家口に到着
23日	徳王と李守信は夏恭、于品卿と張家口で別れ、午後4時半飛行機で厚和に着き、市、区工会議所主催の晩餐会に出席

(矛盾がある記事、孤立的な記事には＊をつけ、なお番号をつけて出典を示す)

1941年第2次訪日行動日程表

2月11日	午後1時張家口出発、2時北京飛行機着く、多田最高指揮官、王揖唐委員、盛岡興亜院華北連絡部長官を歴訪、北京ホテルで少憩ののち、午後6時半進社で多田最高指揮官の招宴に出席
12日	午前7時50分北京発列車で満洲經由訪日へ
14日	午前7時15分答礼と親善をかね、関釜連絡船興安丸で来日、下関駅で杉門司税関長、梅川関憲法兵分隊長らと挨拶ののち、山陽ホテルへ、同夜8時30分発特急「富士」で東上
15日	午前6時40分大阪を通過、9時30分ごろ岐阜県に着き、午後3時25分予定より1分遅れ着の東京駅着く、同37分自動車で宮城前に着き、遥拜ののち帝国ホテルへ、4時27分から3分間「訪日の挨拶」の録音を終え、記者団と会見一問一答
16日	午前9時半池上本門寺で在京モンゴル留学生大会を開催、午後1時靖国神社参拝、2時20分明治神社参拝、3時過ぎホテルに帰着、夜雅叙園における蓮沼侍従武官長らの招宴に出席、午後7時半過ぎ宿舍へ＊〔午後1時宿舍帝国ホテルを出発14〕
17日	午前10時宿舍帝国ホテルを出発、宮中に参内ののち、大宮御所を

	はじめ各宮家に伺候，午後 2 時半北白川宮故永久王殿下の高輪の御殿に伺候，大妃殿下に面会＊〔蒙古聯合自治政府成立の陰の人として活躍した善隣協合理事長井上中將の告別式に焼香のため青山斎場へ11)〕
18日	午前10時宮中に参内，10時半鳳凰の間に参進，天皇と会見，午後 3 時30分東條陸相，鈴木興重院総務長官代理，松岡外相を歴訪，4 時半外相官邸を訪ね，夜 7 時から外相官邸で松岡外相主催招宴に出席，9 時に散会＊〔近衛首相訪問は首相が病気休養中ため取止め9)〕
19日	午前10時22分開会貴族院本会議を傍聴，1 時間後多摩御陵に参拝，午後 2 時豊島ヶ岡の北白川宮故永久王殿の御墓所に参拝，3 時すぎ帝国ホテルへ
20日	日光，仙台への休養旅行をキャンセル，午後 1 時40分牛込若松町の臨時陸軍東京第 1 陸軍病院を訪れ，雨天体操場に集まった傷病兵代表約400人に懇ろな挨拶ののち，義眼の作り方，点字の読み方を見学ののち，隻脚，隻腕の「勇士」の分裂行進や銃剣術，剣術，相撲，かんな削りなど，不自由を克服した「勇士」たちの運動作業を 1 時間見学，のち第 2 陸軍病院慰問へ，午後海軍省へ傷兵慰問金 1 千円を献納
22日	午後 2 時過ぎ西大久保の善隣協会を訪問，学寮を見廻り，同協会構内のモンゴル研究所などの施設を視察，午後 3 時頃宿舎に引き揚げ
23日	午前10時在京モンゴル人留学生約100人を帝国ホテルに招き午餐を催し，正午すぎまで歓談
25日	午後 3 時半牛込区若松町102の皇武会を訪れ，同会独得の合気武道を見学，4 時宿舎へ，夜11時25分上野駅発電車で仙台へ
26日	午前 8 時21分仙台着き，午前11時半頃宮城郡岩切村善王寺〔善応寺〕の「蒙古の碑」の供養に参列，松島，塩釜から夕刻宿舎へ〔12)〕＊〔ウルドム・バートル（大阪外語モンゴル語教師）名古屋まで徳王を出迎へ，徳王と都合によって一緒に帰国するか帰国を延期するか相談10)〕
27日	午後 1 時19分盛岡駅着く，1 時45分南部伯爵家別邸に，休憩のの

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

	ち山内知事，南部伯，見坊市長と昼餐を共にし，のち商工会議所貴賓室で面接，記念写真撮影，福田翁と握手，3時半南部伯爵家別邸を出発，5時県庁前，桜山神社横を通り，旧不来城址で下車，国立種馬育成所，岩手公園を視察，5時50分から秀清閣の官民合同歓迎晩餐会に出席，午後8時閉宴，8時32分盛岡駅発電車で花巻温泉へ，午後9時20分花巻着く，松雲閣へ，
28日	午後1時花巻温泉紅葉館で瀬川彌右衛門氏の招宴に出席，3時半療養所を訪問，7時松雲閣へ
3月1日	帰京の予定を変更，午前10時花巻温泉を出発福島県飯坂温泉へ。 ＊〔午前10時47分発急行で東上17〕〕
4日	＊東京に帰還（外務省 1965：94）
5日	午前9時東京駅で，支那派遣軍総司令官畑俊六大将を見送り＊ 〔千葉県松戸飛行機乗務員養成所を見学（外務省 1965：94）〕
6日	午後6時帝国ホテル宴会場に朝野名士，知己80名を招きお別れの晩餐を開き，午後8時閉宴
7日	＊午前10時首相官邸に近衛首相を訪問〔13〕〕
8日	午前9時東京駅発特急「燕」号で帰国の途に就く
9日	午前7時伊勢神宮に参拝，9時38分宇治山田駅発11時32分着の電車で大軌八木へ，橿原神宮参拝，奈良ホテルで昼食ののち，桃山へ。午後3時奈良電桃山駅に着き，桃山御陵参拝，5時27分京阪天満橋着電車で来阪，新大阪ホテルへ，7時在阪軍官民代表者を招き同ホテルで招宴，9時過ぎ閉宴＊〔大阪陸軍病院を慰問（外務省 1965：94）〕
10日	午前10時15分李王師団長に面会，中軍司令部，府庁，金岡陸軍病院，阪神海軍部，市役所，商工会議所を歴訪，正午宝塚へ，宝塚ホテルの阪急主催の招宴，観劇に出席，午後5時半帰阪，新大阪ホテルの大阪府，市，商工会議所共催の歓迎会に出席
11日	午前10時45分大阪駅発電車で西下下関関閘連絡船にて帰国の途に就く

（矛盾がある記事，孤立的な記事には＊をつけ，なお番号をつけて出典を示す）

参考史資料

1. 外務省外交史料館所蔵史料

「蒙疆首脳者ノ訪日ニ關スル記事掲載差止ノ件」 B02031139100

「昭和16年 2 月 8 日松岡外務大臣発日高代理大使宛電報」 B02031109000

「徳王應待要領（案）」 B02030528200

「松岡大臣，徳王會談録」 L3.3.0.8

2. 新聞

1938年

大阪毎日新聞

1) 10月19日「蒙疆代表を迎ふ」

2) 10月20日「蒙疆三自治政府首脳来朝す “日本の支援に感謝” 徳王らけふ
門司に上陸」(夕刊)

3) 10月21日「勳章拝受の光栄に 徳王ら感激の涙 明治神宮，靖国神社参
拝」(日刊)

4) 10月22日「徳王謁見 有難き御言葉を賜ふ」(夕刊)

大阪朝日新聞

5) 10月17日「徳王ら訪日の旅 蒙疆首脳十九日来朝」(日刊)

6) 11月 6 日「蒙古服の外語生に 相好崩す徳王一行迎へ商都の感激」(日
刊)

東京朝日新聞

7) 10月17日「蒙疆代表訪日 徳王一行廿日帝都入り」

讀賣新聞

8) 10月20日「日本の御援助に感謝 けさ来朝徳王一行メッセージ」(夕刊)

1942年

大阪朝日新聞

9) 2 月19日「徳王陸相らを歴訪」(夕刊)

10) 2 月26日「昔は蔣の『愛弟子』いま日本の学園に “恩人” 徳王を待つ蒙
古青年」

東京朝日新聞

11) 2 月20日「徳王北白川宮御墓所に参拝」(夕刊)

徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について

12) 2月27日「徳王・仙台を巡遊」(夕刊)

13) 3月8日「徳王, 首相訪問」(夕刊)

讀賣新聞

14) 2月17日「徳王・明治神宮へ参拝」

新岩手日報

15) 2月26日「徳王昨夜上野発」(日刊)

16) 2月27日「あす国賓徳王来盛 日蒙両国旗を翳して大歓迎」(刊)

17) 3月2日「徳王, 名残惜しげにけさ帰京の途につく」(夕刊)

3. 文献

内田勇四郎 1984『内蒙古における独立運動』朝日新聞西部本部

外務省(編) 1965『日本外交年表並主要文書』(1840-1945) 下 原書屋

鹿島平和研究所(編) 1973『日本外交史 満州事変』第18巻 鹿島研究所出版会

漢語大辞典編輯委員会(編) 1991『漢語大辞典』漢語大辞典出版社

呉美恵 1986「蒙古自治運動始末の読後感」『日本とモンゴル』21-1 (88頁)

呉美恵 1986「呉鶴齡回想録」『日本とモンゴル』21-1 (89-111頁)

呉美恵 1989「呉鶴齡回想録」『日本とモンゴル』24-1 (115-124頁)

黄奮生(編) 小泉名美男(訳) 1980「内蒙盟旗自治運動実記」『日本とモンゴル』15-1 (43-55頁)

黄奮生(編) 小泉名美男(訳) 1980「内蒙盟旗自治運動実記(続)」『日本とモンゴル』15-3 (27-42頁)

札奇斯欽 1985『我所知道的徳王和当時の内蒙古』(1) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

札奇斯欽 1993『我所知道的徳王和当時の内蒙古』(2) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

善隣協会(編) 1938『蒙古大観 昭和13版』改造社

田村實造 1944「清朝の蒙古統治政策」『異民族の支那統治研究 清朝の辺疆統治政策』(13-97頁) 東亜研究

田山茂 1954『清時代に於ける蒙古の社会制度』文京書院

- 田山茂 1957「清朝の対蒙古政策」『歴史教育』5-12 (25-30頁)
- ドムチョクドンロブ口述 森久男 (訳) 1994『徳王自伝』岩波書店
- 内務省警法局 (編) 1987『外事警察概況』昭和16年 不二出版
- 中嶋万蔵 1971a「徳王とともに③」『日本とモンゴル』6-7 (67-69頁)
- 中嶋万蔵 1971b「徳王とともに④」『日本とモンゴル』6-8 (49-53頁)
- 中嶋万蔵 1971c「徳王とともに④^{ママ}」『日本とモンゴル』6-9 (51-56頁)
- 中嶋万蔵 1972a「徳王とともに⑥」『日本とモンゴル』6-10 (83-87頁)
- 中嶋万蔵 1972b「徳王とともに⑦」『日本とモンゴル』7-4 (28-35頁)
- 中嶋万蔵 1972c「徳王とともに⑧」『日本とモンゴル』7-5 (26-30頁)
- 中嶋万蔵 1972d「徳王とともに⑨」『日本とモンゴル』7-6 (43-47頁)
- 中嶋万蔵 1972e「徳王とともに⑩」『日本とモンゴル』7-7 (45-49頁)
- 中嶋万蔵 1972f「徳王とともに⑪」『日本とモンゴル』7-8 (30-31頁)
- 中嶋万蔵 1973「徳王とともに⑫」『日本とモンゴル』8-1 (49-54頁)
- 中見立夫 1995「テムチョクドンロブ」『世界民族問題辞典』平凡社
- 長山義男 1987「徳王の悲劇 戦中秘密」『自由』29-9 (106-113頁)
- 日外アソシエーツ編集部編 2000『人物レファレンス事典 新訂増補』(明治・大正・昭和戦前編) 日外アソシエーツ紀伊国屋書店
- 松井忠雄 1966『内蒙三国志』原書房
- 森久男 2000『徳王の研究』創土社
- らくだ会 (編) 1973『高原千里』らくだ会本部
- らくだ会 (編) 1975『思い出の内蒙古 内蒙古回顧録』らくだ会本部
- 劉映元 (整理) 1985『李守信自述 内蒙古文史資料』20 内蒙古人民出版社
- vačirbatu 2003『demčuydongrub-un vačirbatu』(『徳王之子』) 内蒙古人民出版社